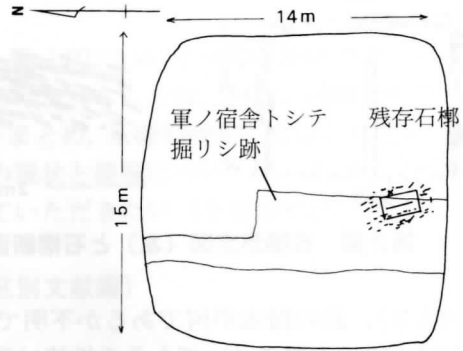


大村市黄金山古墳の調査

開 正和

昭和24年11月25日以後調査中の古墳で未だ調査不十分ですので中間報告の意味で書いて見たいと思います。

大村市福重町今富郷に在り、多良嶽の裾が滑らかなスロープを描いて水田の中に入り込む標高50mの丘陵の尾根を利用して造られた高さ約3m、長さ15m、幅14mの現在ほぼ方形をなす盛土の上に雑木、竹等が茂り、戦時中軍の壕宿舍築造中発掘されたもので、現在に於いても石槨の端が残り、その出土品は石槨に用いてあった水成板石にて囲い小舎を建て、古墳の上に安置してある。



第1図 墳丘平面略測図

南側は道に沿い削り取った跡、明にして居り其他の辺は畑に隣接する為、形は変形して居ると思われ、現在は方墳の如きであるが方墳なりや円墳なりやは俄に之を辨じ難い。

石槨も図の如く南側に偏って埋置してあり残存部分が土地所有者平野源治氏の言に依りますと、長さ約2m、幅約1.8mのほぼ方形に近い平面をなし、高さ約1.2mの大きさにして、壁面は扁平な水成板岩を緻密に小口積とした整美なもので表面に厚く丹を塗附して(註1)、平滑な壁面をなしており、又中央に水成岩を用いて簡単な隔壁を有している事がこの古墳の特徴であり、弥生式の箱式棺の伝統を残すと共に、隔壁発達の際ち、個人墳より家族墳への始源形式をなしている物として注意される。

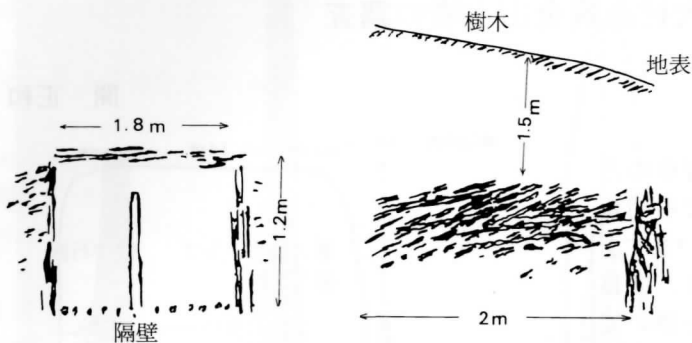
羨道に就いては不明であるが表土より1.5mの深さにあり、南に偏し過ぎて居り、又北九州に同種石槨を有する畿内前期様式の前方後円墳に極く短い羨道の存在を報じられている事等からして(註2)、此の古墳にも同様な始源の姿の羨道が在ったのではないかと想像せられる。

床には砂利を敷き、壁面のみならず、この砂利の上にも朱を塗ってあり、出土品としては人歯及び大腿骨の二人分、同時に副葬品として(調査中に判明した物のみ)鉄鍬、鉄製刀剣数口、鉄槍及び供献具としての素焼土器約十個にして鉄製品は全て錆びているので詳細な点は不明であるが刀剣は全て両刃直刀にして幾重にも折畳して鍛冶した跡が見られ、日本刀の前身にしてすでに相当に進んだ鍛冶術が行われていた事が窺えるのである。

黄金山古墳出土土器は全て供献の具として作られた物にして、発掘の際、注意して掘られた由で完全に近く保管されており、平野氏の理解ある取り計らいで頂くことができたのは望外の喜びであった。

其の一つである次図の土器(図は省略 一事務局註一)は表面は赤褐色なれど土質は灰白色にして焼成温度は比較的低温、弥生式系統の土器である。

器内には篋にて描かれた巴型刻線があり、内側部にも同様、横線刻線がある。整形には



第2図 石槨想定図（左）と石槨断面図（右）

轆轤が使用せられ、器台内には抉り取られた空洞がある。此の土器と富ノ原遺跡出土高杯土器と比較してその進歩の跡が見られて面白い。

不整形な粗雑なる手作りの土器にして、色は前者に同じく赤褐色にして土質も又焼成温度等も同じ様であるが、内部に灰白色の粉末を蔵していた

物で（註3）、此の粉末が何であるか不明である—長崎師範学校教授池田晴氏に鑑定依頼中—ので、此の土器についてもその性格は副葬品と伝う外、鑑定後に決める事にしたい。

以上甚だ要領を得ぬものでありましたが此等の事より古墳時代の前期の古墳であり、外形はほとんど同様な形をなし、同じく南側に入口を有する横穴式の比較的後期に属する竹松小路口の鬼塚とか恩塚とか呼ばれる古墳への移行の一型式であろうと思います。（未完）

【註】

- 註1 長崎師範学校教授池田晴氏の分析に依る。
酸化鉄 72.7%、残りはSiO₂。故に辨柄であると鑑定
- 註2 森貞次郎「北九州古墳の編年の考察」『西日本史学』創刊号
森本六爾「日本考古学研究」
- 註3 長崎師範学校教授池田晴氏鑑定を依頼中でありましたが、その後、主として顕微鏡検査によりますと、植物性の有機物が約30%を占め、残りは硅酸塩、硅酸及び極く微量の鉄等であります。鉄は辨柄が入る事も考え得るし、そうではないかとも考えられる。又硅酸塩及び硅酸は外部より混入する場合も考えられ、比率はもう少し減ずるのではないかと考えられる。そこで大体この灰白色の粉末は植物性（木質）の有機物がその主成分であろうと思われる。然し未だ用途は不明である。

補遺

ここに掲載した大村市今富所在の黄金山古墳の調査記録は、現在、東彼杵町歴史民俗資料館の開正和氏が長崎師範学校社会科在学中に作成したレポートの一部である。当時、東彼杵町千綿の本地寺（ほんちじ）住職であった井手寿謙氏の指導のもとに、開氏と同じく長崎師範学校学生であった喜々津前直氏の3名が戦時中に掘削された黄金山古墳の聞き取り調査をおこなっている。

このレポートは『九州考古学』誌上に小田富士雄先生が発表された調査報告に先立つもので、小田報告の際にはすでに失われていたとみられる事実がいくつか記述されており、大変興味深い。

とくに石室内に「隔壁」があって2室に仕切られていたということで、レポートにも石槨想定図が附されており、墳丘平面の略測図の「残存石槨」部には、その「隔壁」とおぼしき線が記入されている。さらには主体部が薬床であったこともわかる。

（文責：古門雅高）